

愛知大学人文社会学研究所 『文學論叢』 第一六一輯 抜刷 令和六（二〇二四）年三月二〇日発行

ドイツ語圏の市民化過程における二つの論議…

《スポーツと文化》と《労働者の市民化》

—アソシエーション論への補論として—

河野 眞

ドイツ語圏の市民化過程における二つの論議…《スポーツと文化》と《労働者の市民化》

—アソシエーション論への補論として—

河野 眞

はじめに — これまでの論説との関わり

アソシエーションのモデルケースとしてのスポーツ団体

〔一〕 自由な個人による近代市民社会とアソシエーション

自由な個人による結社としてのアソシエーション

〔二〕 具体例…体操とサッカーの歴史に見るクラブ・組合の《階層と流動》

体操組合

「ドイツ体操連盟」から「ドイツ体操会」の成立

「労働者体操連盟」の成立から「労働者体操スポーツ連盟」

への発展

体操とスポーツ

DFBの成立

ATSBにおけるサッカー

「シャルケ〇四」の場合

アマチュアリズムとプロフェッションナリズム

(補足)

〔三〕 スポーツと文化の相関をめぐる理解の変遷

《文化としてのスポーツ》

ゲートとアイス・スケート

フリードリヒ・シラーによる美と遊びの理論

《スポーツとしての文化》

ステイタスとなったスポーツ

〔四〕 アソシエーション(クラブ・組合)から見た市民文化のダイ

ナリズム

《階層と流動》の並行例としての歌唱クラブ

市民社会の新たな再編の中で

はじめに ― これまでの論説との関わり

日本との比較をも考慮しつつ、ドイツ語圏を例にしながら西洋の集団形成について検討が続いている。特に本誌ではアソシエーション（ドイツ語ではフェルアイン）と呼ばれる結集形態をとり挙げており、今回で七回目になる。アソシエーション、ドイツ語ではフェルアインであるが、広義では結社一般をさすと共に、現実の結社形態ではもう少し限定して使われることが多い。邦語で言えば、社団・組合・協会・クラブ・ソサエティ、あるいは単に団体、などと表現される結集である。そうした呼名からもうかがえるように、ごく身近で誰もがどこかで関係している集団と言ってよい。また（幾らか留保を要するが）日本と西洋諸国との間で原理的な差異があるわけでもない。ちなみにその面での指標の一つは法令関係であろうが、基本的な規定は西洋も日本もそう変わらない。明治時代半ばに西洋の動向に合わせて民法第三三条と三四条の《社団》の規定が設けられたからである（参照、河野二〇二二他）。と共に、アソシエーションは、役所に登録されて社団法人や公益法人や財団法人などになる前の段階をも含んでいる。具体的に言えば、業界団体からホビーの集まりまで、「国境なき医師団」のような国際的なNGOから町内の美化運動の団体やUFOの同好会まで、というようにアソシエー

ションやソサエティは、今日ありとあらゆるモチベーションによってつくられている。学術諸分野の学会組織もその一種である。概括的に言えば、今日の私たちにとって生存の基本的条件である市民社会に照応する結集のあり方である。しかし、それほど一般的であるにも拘わらず、あまり問題にされないのは、ありふれているため水か空気のように意識されないからなのかも知れない。それを改めて問うてきたのがアソシエーション研究である。

かく、変哲もない現実に焦点を合わせて発展した研究の一分枝であるが、西洋社会の理解という課題からは忽せにはなし得ない。逆にそれを押さえる手続きを怠ると、勝手な思い込みになることになりかねない。その端的な事例を挙げれば、いわゆる《世間論》、すなわち西洋は社会であるのには対して日本には世間しかないという奇妙な議論がそうである。周知のように、これは今も論壇において力を持ち続けている。しかし少し注意すると、世間論を説く識者たち、特にその代表者たちは西洋の近・現代の集団形成について考察を蓄積してきたアソシエーション研究について知見をもたずに想像を逞しくしていることが判明する（参照、河野二〇一五及び河野二〇一八）。アソシエーションが西洋社会では人間関係の網目である現実をも、その現実を検討してきた諸々の理論をも見ることなく、西洋社会の特質を中世からの伝統が生きているとか、キリスト教が個人の自覚を促したとか、西洋の家屋は個室が中心とかの当て推量を言い立てて

いる。個と集団をめぐる日本と西洋の比較なら、近・現代の西洋の集団形成に関する主だった理論、そしてそれに照応する実態に目を向けなければならぬだろう。筆者はその空白を幾らかでもうずめる必要を覚えたところから、おおまかながら研究史の整理や（参照、河野二〇一九他）、アソシエーションと公共性との関係（参照、河野二〇二三他）、さらに近年この分野を活気づけている（しかし日本では一向に関心を呼ばない）ジェンダー・フェミニズム・女性史の観点からの再検討の動きを取り上げてきた（参照、河野二〇二二）。

アソシエーションのモデルケースとしてのスポーツ団体

今回もそうした試みの一つであるが、少し扱い方を工夫した。と言うのは、これまでの論説では、どちらかと言えばドイツ語圏で行われている理論を踏まえて概念的な把握に力点を置いていた。しかしアソシエーションという観点から現実（歴史的現実をも含めて）を注目することが一般的になっておらず、そのため西洋の諸理論を紹介しても具体的なイメージにつながらないようである。そこで概念的な説明はこれまでの論説に委ねて、歴史的な推移をも併せて具体的な事情に重点を置こうと思う。なおそれにあたっては、際限なく多種多様なアソシエーションから多少ともモデル的な意味合いもつ種類を選ぶことが望ましく、また現代社会の局面を問うことも

つながり、さらに現代の日本にとって幾らか刺激になりそうな話題にもなればと考えた。具体的には、スポーツに関わるアソシエーションがそうした条件に合うのではないかと思えたのである。むしろ、市民運動のNGOでも、音楽関係でも、歴史学の愛好会でもよいのだが、参加する人の数が非常に多く、どの町にも村にも関連の団体が存在するということではスポーツをめぐる分野はすこぶる一般的である。しかも後に少しふれるが、ドイツの歴史学者トーマス・ニッパードイの言う《アソシエーションの時代》（ニッパードイ一九七二「河野・訳」の始まりからスポーツはアソシエーション形成における主要モチーフの一つであった。

そうしたスポーツ関係であるが、それまたどの角度から取り上げるかが問われよう。ここでは、スポーツ研究者が取り組むようなスポーツの本質ではなく、集団形成という社会的な側面からのアプローチである。そこで視野に入るのが、古くから議論されてきたテーマ《スポーツと文化》である。さらにもう一つのテーマが加わる。近・現代のスポーツ、すなわち市民社会のスポーツとなると、西洋の場合、素通りできないのは市民と労働者という問題である。むしろこれはスポーツだけの問題ではなく、広く近・現代の社会形成に関わる議論であるが、スポーツにおいてもそれは大きな意味をもつ。すなわち市民社会の形成過程における《労働者の市民化》である。これは日本では分かりにくい面があるが、それだけに（直接的にはド

イツ語圏から話題を拾うが）西洋の社会と文化の特質に触れることになるだろう。ともあれ、以上のような工夫の下に、本稿では、具體的な話題を中心に進めようと思う。したがって本稿は、筆者が進めてきた集団形成のテーマからは補論の性格になるだろう。

「一」自由な個人による近代市民社会と

アソシエーション

大まかな指標になるが、近代社会に向かう決定的な里程碑として挙げられるのはフランス革命であろう。それは、西洋の歴史に基準をもとめる理解として私たちの間でも定着している。むしろこの劇的なできごとがすべてではなく、十八世紀から十九世紀の西洋の歴史が示したトレンドにフランス革命も位置づけられるということである。それはともあれ、革命を通じて謳われたのは人間存在のあり方の革新、すなわち自由な個人という原理であった。以後、そうした個人による社会として近・現代が形成されていった、とされる。それが近代市民社会である。しかし自由な個人としての人間は、まったくばらばらに存在しているわけではない。人間が生きては社会生活を営むことであり、それは集団をつくることでもある。

なお用語にもふれると、市民社会の形成とは、簡潔なキイワードでは《市民化》ないしは《市民化過程》である。その市民化は、ド

イツ語では（社会学や歴史学や政治学の一部でとりあげられる）術語 *Verbürgerlichung*、フランス語では *embourgeoisement* ないしは *bourgeoisification*、また英語ではやや説明風だが *bourgeois transformation of society* などがそれに当たる。一口に言えば、幅広い諸々の社会的階層が存在・行動・思念において市民的なスタイルへまとまることを指す。むしろ、このまとまりが均一化や平準化と同義であるかどうかは一考を要する。¹⁾ が、社会生活を営むほとんどの人々が今日では市民という概念で解されているが、その経緯はどうであった、という問いである。もともと、一般に経緯というものは結果にたどり着くと掻き消えてしまい、昔からそうであったかのような相貌を呈するものだが、経緯を見ることは、現在の構図とその問題をたしかめることにもなるだろう。

自由な個人による結社としてのアソシエーション

ところで近代社会が自由な個人によってつくられる社会というのは原理であるが、現実の現象の次元で見ると、それは原理の現象形態の一部、ないしは事の半面である。なお自由な個人という時の《自由な》とは *free, frei* の語が意味するように、形容詞 *los* あるいは接尾辞 *-los* と同義である。つまり *kostenfrei* [kostenlos] (経費のかからない・無料・ただ)、*Das ganze Geld bin ich los!* (金は全部なくなった)、*Freier Eintritt!* (入場無料)、*ein freies Taxi* (空

車のタクシー)「freies Zimmer (空や室)」「Machen Sie sich frei! (診察などで)「裸になってください)」、あるいは pesticide-free vegetables (無農薬野菜) というように何か《無い》ことを指している。それを踏まえて自由な個人とは何かとなると、身分や出身や人種などの生得的ないしは伝統的・因習的拘束が《無い》ことを指す。前近代には、村や町でも、職業・性別・年齢、そして階層の違いによって法や慣習や《世間の目》の拘束が大きかった。言い換えればそれらは《おおよけの》拘束力であった。なお《世間の目》をここで挙げたことについては、違和感をもつ人もいるだろう。つまり暗黙の規制や、噂・風評による秩序への強制であるが、決して日本とかアジアだけのものではない(参照、河野二〇一五)。

そこで事のもう半面が問題になる。と言うのは、自由な人間、つまりフリーハンドを獲得した人間は、いつまでも空気をかかえたままではないからである。空気があることは、自由に填めることができる空白を獲得していることでもある。したがって、種々の因習的束縛を脱して空になった人間が必然的に向かうのは、無拘束だからこそ可能になるような結集であろう。自由な個人の自由意志による結集である。またそうした意味が最もよく表れるのは、家族・血縁・地縁・身分、さらに生業など、いつの時代にも何らかの形で(したがってよくも悪しくも)個人を縛る枠付けから脱した結集であろう。さらに、ここで重要になるもう一つの大きなファクターはひま

な時間、すなわち余暇である。人間が暇な時間をもつこと自体は、おそらく太古からみられたであろうが、それが結社のかたちをとるのは比較的新しい事態であったと思われる。図式的ないしは先鋭なとらえ方をするなら、自由な個人が暇な時間を活かすときの結社がアンシエーションである。自由な個人ならではの可能性を現実のものにするためである。

十九世紀の一〇年代末辺りからの社会の動向について《アンシエーションの時代》の到来と呼んだのは、ドイツの歴史学者トーマス・ニッパードイであった。ドイツ語では《フェルアインの時代》で、筆者は《組合の時代》と試訳した。社団・クラブ・組合・ソサエティなどと呼ばれる結社で、一口で言えば、フランス革命が表面化させた自由な存在としての人間の結集のスタイルが時代の趨勢となったことに焦点を合わせたのである。これについてはすでに取り上げたため、ここでは繰り返さない(河野二〇二一)。

「二」 具体例…体操とサッカーの歴史に見る クラブ・組合の《階層と流動》

市民社会の結社としてのアンシエーション、すなわちクラブ・組合の特質を問うにあたって、親しみやすい話題としてドイツ・スポーツ史に注目するのだが、さらに絞って主にサッカーを取り上げよう

と思う。そのさい体操（トゥルネン）にも言及するのは、ドイツ語圏の場合はそれがスポーツ史の土台だったからである。

体操組合

《体操の父》フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーンが、愛国心すなわち現状の国家形態ではなく統一されるべき祖国への献身とデモクラシーを掲げてベルリン郊外ハーゼンハイデ（現在は市内）に体操稽古場を設けたのは一八一〇年であった。なお体操（Turn, 動詞形 turnen）は、当時、広く身体教練を指す語であった。が、今日この語は、ヤーンの意味と並行して、器械体操（Gerätturnen）を指すことが多い。ヤーンが導入した実技では、鉄棒・平均台・平行棒・跳馬・あん馬・棒体操などの比重が高かったこともそれに関係している。またそこに水泳とフェンシングが併せられた。その呼び掛けはたちまち反響を呼び、体操は大きな運動となった。プロイセン首相ハルデンベルクも運動を歓迎し、体操者（トゥルナー Turner）は対仏戦争への義勇軍の供給源の一つにもなった。しかし対ナポレオン戦争が終息するや、ヨーロッパの国際関係が復元され、ドイツ語圏の領邦国家群の再編が図られた。その評価はさまざまであるが、安定した世界秩序の構築として後にアメリカの外交官ヘンリー・キッシンジャーによって模範視された世界システムの時代でもある⁽²⁾。中心に立っていたのはオーストリア帝国宰相メッテル

ニヒだが、その秩序を脅かしかねない動向は芽のうちに摘みとることに容赦がなかった。体操もその対象となった。体操者でデモクラシーを叫ぶ一人の大学生が保守派の文壇人を刺殺した事件を機に弾圧が始まり、一八二二年初の《体操禁止》措置によってヤーンも逮捕・監禁された。しかしほゞ二十年後、社会情勢が変化し、メッテルニヒの指導力に陰りが出て、体操運動は息を吹き返して一八四八年革命の主要な担い手となった。しかし四八年革命は煮え切らない終わり方をして、結局、抑え込まれた。やがて一八六二年にプロイセン首相となったオットー・フォン・ビスマルクが指導するプロイセン主導の統一政策が推進され、数度の戦争を経て一八七一年にドイツ帝国が成立した。祖国統一が実現したのである。この変化の過程で、それまでデモクラシーと祖国統一を目標に掲げていた諸々のアソシエーションすなわちフェルアイン（クラブ・組合）の多くは、（紆余曲折と枝分かれがありはしたが）ビスマルクの政策に同調するようになっていった。体操組合は大きな運動であるだけに、それが特に顕著であった。

「ドイツ体操連盟」から「ドイツ体操会」の成立

体操者の全国組織、と言ってもまだ国家統一に至っていないなかった時期であるが、それが結成されたのは一八四八年四月であった。第一回の《体操の日》がそれで、時局的には三月革命の初期の段階で

あった。もっともそれに先立つ数年にも幾つかの動きがあり、そこで持ち上がった深刻かつ微妙な問題は、政治的目標をどう扱うかであった。政治を謳うのか、表面上は非政治性でゆくのかの選択で、背景には各地方の主要な体操組合と地元政府との関係が広がっていた。結論は全国組織結成の議論の場にもちこまれた(バウジンガー二〇〇六)。

ヘッセンのハーナウに約四〇の体操組合の代表者が集まったのは、一八四八年四月初めのことだった。……定款には、ドイツ民族体(体操の父フリードリヒ・ヤーンの標語)の発展と強化が謳われた。国民の一体性と兄弟感覚にも言及された。しかし、民主主義的な自由や共和国政府という将来あるべき政治形態への賛意を明記しなかったことを嘆く人々も多かった。そのため、わずか三カ月後の一八四八年七月には早くも二回目のハーナウ大会が招集された。そこでは、政治的立場、当時の語法では政治的か非政治的かをめぐって激しい議論が闘われた。決選投票にまでもちこまれ、結果は、共和国という提案が僅差で敗れた。となると、事は分裂へ進むほかなかった。「デモクラシー体操者連盟」(Demokratischer Turnerbund)が結成されたが、やがて反革命に叩きつぶされた。

もし共和国を掲げれば、君主制の否定になり、体操運動そのものの以後の発展は危うくなっていたであろう。その点では現実路線であった。が、票決が僅差であったことから窺えるように、体操指導者の中には革命の側に立つ者も少なくなかった。「シユヴァーベン体操連盟」の創設者であったテーオドル・ゲオルギ(一八二六―九二)もデモクラシーの闘士であった。一八四八年の革命では体操者たちに武装を呼び掛け、その圧力によって地元政府に腐敗した役人の追放と議会の開催をもとめ、それを実現させた。以後もゲオルギは硬骨漢ぶりを折に触れて発揮し、権力への妥協を肯んじなかった。しかし大きな政治の流れに徹底抗戦するわけではなかった。後には、体操運動が軍隊の教練システムに貢献することにもやぶさかではなかった。なお連盟は一八六八年に「ドイツ体操会」(Deutscher Turnerschaft)となり、会長にはゲオルギが、執行部座長には医師フェルディナント・ゲッツ(一八二六―一九一五)が就いた。ゲッツは後に北ドイツ連邦議会、次いで帝国議会に国民民主党の議席をもった。

細かな動きやエピソードは省いて図式的に言えば、一八四八年に結成された「ドイツ体操連盟」とその後進の「ドイツ体操会」は以後四〇年以上にわたって、ともかくもドイツの体操者をまとめることになった。しかしそこには当初から萌芽的に表れていた幾つかの問題がひそんでおり、時と共に懸案の色合いを強めた。

「労働者体操連盟」の成立から「労働者体操スポーツ連盟」への発展

体操組合は市民的結社の代表的な一つであるが、その変質もまた市民社会の動きと重なっていた。それには二つの要因がある。一つはドイツ帝国の成立によって悲願の祖国統一が実現したことである。またそれに先立って曲がりなりにも憲法が制定され、大きくみればデモクラシーも実現した。そのため紆余曲折はあったが体操の諸団体は、国家統一を主導したプロイセンのビスマルクの政治路線への支持者へ変わっていった。実際面でも、国家が諸制度を整備する過程ではそれに協力した。特に学校体育と軍隊の教練に体操者がノウハウを提供し、実践面での連繋は以後も続いた。

二つ目の要因は、労働者層の増大で、人口に占める割合も高まれば、プロレタリアートとしての社会的比重も大きくなった。それまでも労働者が体操組合のメンバーとなることがなかったわけではない。しかしその場合は、アソシエーション(クラブ・組合)の理念である《身分の違いを越えた》結集が生きていた。少なくとも歴史学者ニッパダイが《アソシエーションの時代》と呼んだ一八一〇年代から一八四八年革命以後もしばらく続いたエポックではそうであった。

次のエポックに向かう基底的な動きは資本主義の本格化に伴う労働者の飛躍的増大と、その組織化であった。後に「ドイツ社会民主党」

としてまとまる社会民主主義が労働者の利害を代弁し、またその心をつかんで拡大した。ソーシャル・デモクラシーである。その広まりに対しては、国家や教会が危機感を抱いて対抗する動きを強めた。すでに一八六七年にビスマルクは、「国民自由党」を中心とする保守勢力を糾合して、議会における与党の形成を図った。それは、政治思想としてはナショナル・リベリズムと呼ばれる。またキリスト教会も存在感を強める労働者層をキリスト教会に再結集させるために動き出した(桜井二〇一九)。後のカトリック政党「中央党」につながる聖職者の政治への関与や、オピニオンリーダーのメインツウ教ケテラーの後援を受けたソーシャルワークの新しい組合組織「コルピング協会」の活動はその脈絡に位置づけられる(河野二〇二二:五四―五五)。労働者層が体操運動において独自の組織を目指したのは、そうした状況の下においてであった。歴史学者ハンス・ヨアヒム・タイヒラーは、ドイツの労働者スポーツ史に関する論説を次のように書きはじめている(タイヒラー一九八七:一七)。

「労働者体操連盟」(Arbeiter-Turnerbund = ATB)の成立を追跡することは、「ドイツ体操会」(Deutsche Turnerschaft = DT)の変化をなぞることでもある。すなわち、国家統一と自由という市民的理念に貫かれた運動が帝政とビスマルクに忠実な組織、しかも社会主義者鎮圧法を歓迎したばかりか、独自

にそれに順応するような組織への変質である。《歌唱者、体操者、射撃者、これらは自由の支柱である》と三月前期に言われたのに代わって、一八七一年以後は、《歌唱者、体操者、射撃者、これらは反動の支柱である》という状況の出現であった。

体操組合諸団体は、一八七一年以後、総じて、軍人組合の派手な愛国主義に重なってゆき、そこで培われる祖国愛はヴェルヘルム帝政の軍事的色彩を強めていった。そうではあれ、体操には、政治的革命的片鱗が残っていないわけではなかった。十九世紀の五〇、六〇年代には、一八四八―四九年革命にアクティヴに関与した体操者のラディカルなデモクラシーの役割への記憶がなお強く生きていたとすれば、七〇、八〇年代に体操のデモクラシー的で進歩的な色合いを受け継いだのは体操に加わった労働者たちであった。

革命の精神を受け継ぐと言っても、それ自体幅がある。が、ドイツの場合、社会主義者フェルディナント・ラッサールの現実路線が、ラッサールの早世後もその同志たちによって推進された。理論的水準や、先鋭な目標設定では批判にも見舞われるが、長期的にはこれが今日のドイツの社会民主党につながる。労働者への影響も大きく、そうであるだけに政権は警戒を強め、一八七八年にはいわゆる「社会主義者鎮圧法」が公布された。

この法律によって、労働組合をはじめ社会民主主義の諸団体の活動は著しく制限された。その中で、労働者たちが法の間隙を縫ってとめた結集の主要な場は、各地の体操組合であった。労働者主体の体操組合という考え方はすでに一八五〇年代からその動きがあり、それは政党の動きとも連動していた。が、それまた一様でなかった。教育を満足に受けられなかった若者のための産業教養組合や労働者教養組合の中に体操部門が設けられることもあった。体操が謳われれば、官憲も頭から抑えるわけにはゆかなかった。とりわけ巨大組織「ドイツ体操会」を構成する団体であれば、なおさらであった。そうした背景があつて、社会主義者鎮圧法の期間に「ドイツ体操会」は規模が拡大した（タイヒラー一九八七：一八）。

「ドイツ体操会 (Deutsche Turnerschaft DT)」は体育の分野では最初の（かなり永く唯一の）巨大組織であり、その規模はメンバー数で挙げると一八七六年に約一五万人、一八九〇年には四〇万人以上、一九一〇年には一〇〇万人に達したが、これには工業労働者の増大が大きく与っていた。

かく、労働者の比率が高まっていたが、「ドイツ体操会」の執行部は、プロイセンのビスマルクの支持に傾いていた。執行委員会座長フェルディナント・ゲッツが帝国政府の与党「国民民主党」の代議士と

して国会に議席を占める上で、「ドイツ体操会」はその票田となることが期待された。それに対して、労働者体操の組合諸団体は「ドイツ体操会」の非主流派の有力な勢力を形成した。そうではあれ、同会がゲッツとテオドル・ゲオルギとの二頭体制である間は、ゲオルギが一八四八年革命の指導者の一人であり、以後も権力に屈しない姿勢を見せたため辛うじてバランスがとれていた。エピソードを挙げれば、ゲオルギは生涯、赤い鍔広帽を被り、しかもオフイシャルな場でもそれを貫いた。実際には茶色に近い赤だったが、その鍔広帽はフランス革命期のジャコバン・ハットに遡り、また一八四八年革命で闘士たちがつけた帽子を想起させた³⁾。が、一八九二年にゲオルギが亡くなるとバランスが崩れた。その前からゲッツの執行部は、労働者体操運動が発言力を高めることを警戒し、労働運動の有力組織を背景に労働者体操者が執行部の一角を占めようとする動きをもはねつけていた。たとえば一八七八年のプレスラウにおける体操祭では、祭典が《社会主義者大会》の様相となることに、主流派は過剰なまでに警戒心をあらわにした。先に挙げた政治思想で言えば、主流派のナシヨナル・リベラリズムと反主流派のソーシャル・デモクラシーの確執である。そうした内部の軋轢が続いていたが、折からビスマルクに代わって親政を始めた皇帝ヴィルヘルム二世が一八九〇年に社会主義者鎮圧を更新しないという、いわば善政をみせた。その状況変化の下、不満の鬱積とすでに高まっていた地力が

相まって、一八九三年に「労働者体操連盟」(Arbeiter-Turnerbund = ATTB) が結成された。それゆえドイツ体操運動は、以後、二つの団体によって担われることになった。なお同連盟は一九一九年に「労働者体操・スポーツ連盟」(Arbeiter-Turn- und Sportbund = ATTB) となった。その名称からうかがえるように、ドイツ・スポーツ史を貫くもう一つの課題である《スポーツ》問題を組織的に解決したことも、団体名は示していた。これについては次に取り上げる。なお以後の推移では、四〇年後、両者ともナチスによって解散させられた。「労働者体操・スポーツ連盟」は一九三三年に禁止され、「ドイツ体操会」は生き残りを図ったが不調に終わり、一九三五年に自主解散を選んだ。戦後は、一九五〇年にテュービンゲンで「ドイツ体操連盟」という一八四八年当時の名称で再建された。ナチス以前に形成された土台を新たな状況で受け継いだのである。今日、同連盟は一七〇〇組合を擁し、メンバーは四六八万人を数える⁴⁾。「ドイツ・オリンピック委員会」と重なる「ドイツ・スポーツ連盟」(Deutscher Sportbund) はともかく、「ドイツ・サッカー連盟」(二万四千組合、正規メンバー七〇〇万人) に比べると中規模であるが、独自の伝統の根強さを知らしめるには充分である。

(体操とスポーツ)

体操運動について簡単に取り上げたが、実技の面で見ると、体操

(Turn / turnen) では基本的には集団技の側面が重んじられてきた。今日もドイツ語圏の体操団体は大きな広がりを保ち、定期的に体操祭が開催されるが、その実際(ないしは写真)を見れば分かるように数十人、時には数百人が一団となって実技を披露する。平行棒の演技でも、同じ倒立や回転を数十人が次々に行なうのが一つの流れとして披露される。

しかし集団技の原則は、体操の実習者の感覚との間で次第に距離ができていった。この点で重要なのは、十九世紀後半にイギリスから《スポーツ》の概念が入ったことであった。ドイツ・スポーツ史を貫く大きな問題であるが、体操とスポーツという二つの理念の調整である。体操とスポーツの違いが表面化した節目の一つは、一八九六年にアテネで開催された第一回オリンピック大会であった(以下はバウジנגガー二〇〇六)。このときドイツは、参加者・一位受賞者(まだメダルはなく月桂冠が授けられた)とも、アメリカ、ギリシアに次いで三位となった。参加者はほぼ全員がドイツ各地の体操組合のメンバーであった。が、彼らは帰国するやそれぞれの体操組合から除名やそれに近い扱いを受けた。それは彼らが行なったのはスポーツであり、体操とは相容れないと見られたからである。具体的には、その行為が個人として順位を競うものであり、また部分的な身体技への特化は心身の調和的な育成という理念にはそぐわない、というのであった。しかしこれは逆に一種の転機となっ

た。体操の実習者が、個人として身体技の向上を目指すのは自然なこととも言える。それが抑えられることに対しては、団体から脱退する動きが起き、逆に体操組合の中にはスポーツの理念を取り入れるところも現れ、十九世紀末から二〇世紀初めの体操組合は揺れ動いた。以後の流れとしては体操とスポーツの共存が図られた。組織面でも、一九一九年には労働者スポーツ界では両者が融合して「労働者体操・スポーツ連盟」(Arbeiter-Turn- und Sportbund = ATSB)となった。またそれと並行して、両者の分離による解決も模索された。よく挙げられる節目では、少し後の一九二二―二四年の《清廉決別》がある⁵⁾。これはドイツ体育の伝統である《体操》と近代《スポーツ》とが、遺恨も後腐れもなく別組織になるという出来事であるが、実際には全体がそうだったのではなく、一つの組織として体操とスポーツの融合が図られることも多かった。今日のドイツの体育団体によくみられるTSVはそれを反映している。Turn und Sport-Vereinの略で、《体操とスポーツの組合》の意味である。

折角なので今日活動している団体から一例を挙げよう。現在ドイツ・サッカーのブンデスリーガ一部に在籍するチームに、日本では略称「ホップフェンハイム」ないしは「TSG 1899 ホップフェンハイム」がある。歴史は古いが、ドイツのプロサッカー界ではニューフェイスに近い印象がある。プロサッカーでは永年ブンデスリーガの八部や九部であったのが二〇〇〇年台から急速に上昇して二〇〇八年に

一部在籍となったからである。これは、かつてそのチームでプレイをしたことがあり、後にIT関連でソフトウェア会社SAPの創業者となった実業家ディートマル・ホップが巨額の資金を投じてサッカーチームに特化したスポーツ組合に改変したためで、サッカー以外（一九八〇年代までは柔道、柔術、ハンドボール、チェスの諸部門が活動していた）を切り捨てたことの当否も併せて、このドイツ・プロサッカー界の台風の目は今日マスコミではよく話題になる。ただし大再編はしても由緒ある団体名Turn- und Sportgemeinschaft 1899 Hofenheim e.V.を引き継いでいる。TSGは体操（Turn）とスポーツが融合した団体の略記、また一八九九は創設年、ホッフェンハイムは根拠地、e.V.はeingetragener Verein（登録団体）の略称である。

労働者の市民化過程について

体操組合をめぐって、市民層と労働者層の二つの階層の対立と交流に目を走らせたが、これをサッカーに焦点を合わせてもう少し見とおきたい。なお予め言い添えれば、体操（トゥルネン）もそうだが、サッカーの場合も実技やルールの面では市民スポーツを謳う場合と労働者スポーツを名乗る場合の間には（時々無理に差別化が図られたことがありはしたが）違いはなかった。したがって要は社会構成の問題であり、また階層という思念の問題でもあり、しかもそれは忽せにはし得ないものであるために段差が生じたのである。

(DFBの成立)

サッカーがイギリスからドイツへ移入された最初はともかく、それが実際にかたちをとり始めたのは一八八〇年代であった。プロイセン文化省が学校体育の一部にサッカーを導入したのは一八八二年であった。それから二〇年も経たないうちにサッカーは男性の若者の間で爆発的な人気を呼び、各地でチームがつくられた。他のチームとの試合が欠かせないために、クラブ・組合への組織化もとめられた。小区域から中地域へ、さらにドイツ全土へ、また外国チームとの交流へと延びるのも必然で、全国的な組織は喫緊事となった。かくして一九〇〇年一月二八日にライプツィヒにおいて、八六団体の代表が集まって「ドイツ・サッカー連盟」(Deutscher Fußball-Bund DFB)が創設された。なお創設前後から以後の動きについては一九九九年に大部な『ドイツ・サッカー連盟一〇〇年史』が同連盟によって編まれており、『DFB一〇〇年史』、多くの情報が整理されている。他にも、著名なサッカーチームやそれを擁するスポーツ組合についてはドキュメントが多彩に刊行されている。それだけ一般性のある話題が多い分野ということなるが、ここでは無数とも言えるほどのエピソードを拾うことはあきらめて、ドイツ・サッカーのもう一つの系譜に注目しようと思う。《労働者サッカー》である。

(ATSBにおけるサッカー)

サッカーに集まった若者たちの少なからぬ割合を占めたのは若い労働者や労働者の子供たちであった。しかし彼らが、市民の理念によるDFBに結集することに対して、労働者スポーツ運動の指導者たちは内心穏やかではなかった。そのためたちにはまともならず、対応は混乱した。そこでは先ず『市民的・資本主義的社会の基本原理が労働者階級にまで拡大し』、労働者の若者が市民に取り込まれているという危機感がはたらいた。それが当初は、サッカーという行為のマイナス面の指摘へとつながった。『粗野で』、『感性に欠け』、『残酷で』、『非市民的で』、『行儀が悪く』、『動物的本能を掻き立て』、『狂気じみたプレイ熱を解き放つ』と言い、これでは『プロレタリアートのスポーツ』になってしまう、とまで評した。が、それは、ねじれた心理であった(ハウク一九八七・一六〇―一六一)。

体操者が主導してきた労働者スポーツ運動の観点からは、この競技は、競争性、すなわち二手に分かれて勝利を争い、また身体をぶつけ合うために、一面では紛れもなく競争思考を煽るものであった。また他面では、個々の優れたプレイヤーを特別視するのは、エゴイズムを助長すると考えられた。加えて、体操とは対照的に、サッカーは、身体を部分的に鍛えるために負荷を高め、労働の現場で喫緊の作業に毎日いそしんでいる人間

に過剰なストレスを潜在させる危険がある、とされた。

競争性へ批判的姿勢や、身体の部分的鍛錬への忌避は、少し前までは市民体操者たちが代弁していた物の見方や価値観であった。それを労働者層が苦勞の末に自己のものとすることに成功したと思われるたときに、その足元をすくうような課題を突きつけたのがサッカーであった。しかも事態は放置できなかった。『労働者体操新聞』(Arbeiter-Turn-Zeitung ATZ)の一九一四年八月二日付けの報道である(ハウク一九八七・一六二―一六三)。

サッカーは、この二〇年の間に予想を超える広まりを見せた。・・・今日、「ドイツ・サッカー連盟」(DFB)には、二〇〇〇を超える組合、一八五〇七人のメンバーが集まっており、早晩、労働者スポーツの諸組織として見てもその最大になるだろう。現実には、サッカー愛好家の圧倒的多数は労働者とその子供たちである。メンバーの八〇%が労働者層と言っても、決して誇張ではない。・・・ここでは残念な事実として、組織された労働者でもある若者たちが、DFBに結集する組織されたプレイヤーでは最大の割合を占めている。

が、状況は外的な要因によって大きく変化した。第一次世界大戦で

ある。若者を含む多くの男性が戦場へ赴き、スポーツの諸団体は休止状態となった。そして戦後、多くの団体では役員の顔触れが変わり、組織再編をも併せて再出発を図った。ATB（労働者体操連盟）は懸案の《スポーツ》との調整を組み込んで一九一九年にATSB（労働者体操・スポーツ連盟）となった。そして一九二〇年に連盟の《部局》（Spalte）としてサッカー部門を発足させ、運営のためにサッカー委員会が設けられた。特に二年後に委員会の二代目の座長となったローベルト・リーデル（Robert Redel）の活躍はめざましかった。リーデルは一九三三年まで務めて、その間、特にライプツィヒのATSBの学校に設けられたサッカー教員コースの責任者となった他、審判教本の編者、さらに「社会主義労働者スポーツ・インターナショナル」のサッカー委員会座長として、労働者サッカーの発展に尽力した。

ATSB内のいずれかの組合においてサッカーに携わる労働者は一九二六年に合わせて九〇〇〇〇人であったが、一九三二年には一三六〇〇〇人を越えていた。同年、「労働者体操・スポーツ連盟連盟」(Arbeiter-Turn-und Sportbund = ATSB) の『労働者体操新聞』(Arbeiter-Turn-Zeitung ATZ) と、少し前の一九一九年に地域を超えた雑誌として創刊されていた週刊誌『自由なスポーツ週間』(Freie Sportwoche) とが合体して『サッカー前線』(Fußballstürmer) に衣替えた。

しかし、労働者サッカーにはその属するATSBから折に触れて制約が課せられた。ATSBの側からは、労働者スポーツにふさわしい理念と規律をもとめる趣旨ではあったが、サッカーに特化せず、定期的に体操の実修に加わることが促された。当時の言い方では、『サッカー・オンリー屋』(Nurfußballer) という貶めた言い方ができ、体操の理念である心身全体のバランスある育成への引き戻しがさまざまな形で試みられた。

ATSBは、これと同じ考え方から、市民スポーツのマイナス面は個人をあまりに重視することにあると見て、個々のプレイヤーへの一種の英雄信奉を批判した。それを受けて、たとえば労働者スポーツ新聞では、プレイの紹介でも、選手を名前で呼ぶのではなく、ポジションで表記するなどの制約を課したりしていた。またプレイヤーを極限的な疲労に追い込むことから解放する意図で、プレイ時間の短縮なども試みられた。しかしいずれも趨勢を覆すには至らなかった。

(シャルケ〇四の場合)

今日の日本では、世界各国のサッカー事情、とりわけ強豪チームについては詳しい人が幾らもいる。日本人プレイヤーが在籍するチームとなればなおさらである。「FCシャルケ〇四」もそうで、二〇一〇年に「鹿島アントラーズ」からDF内田篤人が移籍して

二〇一七年まで活躍したことで知られる。さらに二〇二二年七月には日本代表チームのキャプテン吉田麻也の移籍が話題になった。が、翌年六月には(シャルケ〇四のブンデスリーガ二部降格のあたりで)退団が発表された。そうしたこともあってドイツのブンデスリーガの中では馴染みのあるチーム名である。話題も豊富であるが、ここでは階層と流動という本稿のテーマに即してわずかながら経緯にふれようと思う。

その出発点は不明な点もあるが、一九〇四年にルール工業地帯の一角ゲルゼンキルヒェン市の一区画シャルケにおいて一二歳から一四歳(年齢は伝承によって異なる)の労働者家庭の少年たちが集まってサッカーチームを組んだことに起因するとされる。シャルケの地名は、中世にその記録があるが、しゃれこうべ(シエーデル)の形をした丘にちなむとの意味付けが伝わる。なおしゃれこうべについて言えば、ヨーロッパでは町の近くの小山をゴルゴタの丘に見立てているところは無数にあり、その一つであつてもおかしくないが、またふざけて付けた名前かも知れず、シャルケの場合はたしかなことは分らない。ともあれ、立地は、工業地帯の真つただ中であつた(ハウク一九八七…)。

長く延びる工場棟の数々、天を衝く煙突、鉦坑の巻き上げ機、丘陵の頂^{たかね}さながらのぼた山、いかついガスタンク、巨人のごと

きクレインの腕、これらすべてが溶け合つた凄まじいカオス。溶鉦炉から立ち上がる濛々たるガス、コークス炉が噴出する硫黄まじりの蒸気。それを覆う轟音のような労働歌、そこに重なる車輪のきしみ音と機械の打音と震動。

球団の発展史をあつかつた基本書が描くシャルケ一帯の様相である。発足した団体は、当初「ヴェストファリア」を名乗つた。

野心に満ちた少年たちは、数年前に発足していた「ライン・ヴェストファーレン・プレイ連合」(WSV)の一員となつて、他の組合との定期的なプレイを実現させることに向けて動き出した。

しかし連合への参加は連合指導部の官僚主義によって何度も阻まれた。当時、連合は、独自組織の結束を維持するために新規の受け入れには頑なな態度をとつていた。しかしまた連合は一種の妥協をアドヴァイスした。早く一八七七年に設立されてWSVの一員となつていた「シャルケ体操組合一八七七」と合併し、そのサッカー部門になるという便法である。これによって、「ヴェストファリア」は「西ドイツ・プレイ連合」(WSV)のチャンピオンシップに参加することが可能になった。もつとも、はじめは下位技能者クラスではあつた。

第一次世界大戦が始まると、サッカー部門は、ほとんどのプレイヤーが動員されたため弱体化し、やがて解散に追い込まれた。しかし一九二五年には「ヴェストファリア」は再開され、また一九一九年七月にはあらためて「シャルケ体操組合」への融合を確かめた。団体は、「体操・スポーツ組合シャルケ一八七七」(Turn- und Sportverein Schalke 1877)となった。しかしこの合体は長続きしなかった。連合の政治的な確執、すなわち「体操・スポーツ組合シャルケ一八七七」が所属する「ドイツ体操会」(Deutsche Turnerschaft)の指導的な役員たちが、体操とスポーツとの《清廉決別》をもとめたからである。これは、彼らの組合のメンバーは、同時に他のスポーツ連合に組織されてはならないということであった。そのため、サッカー部門は「体操・スポーツ組合シャルケ一八七七」を出て、一九二四年に「西部ドイツ・プレイ連合」(WSV)の独立した組合となった。しかしもはや古い「ヴェストファリア」を名乗らず、「FCシャルケ〇四」(Fußball-Club Schalke 04)となった。

ちなみに一般論で言えば、FCの頭には数字の《一》がつくことがあるが、これはその地域で最初のサッカー・チームであることを示す。たとえば、目下はブンデスリーガ三部だが、一九九〇年代半ばまで一貫して一部所属であった「FCのカイザースラウテルン」がそうである。しかし「シャルケ」の場合は先行団体として「体操・スポーツ組合シャルケ一八七七」が存在していた。またそこから飛

び出したために、設立年も一八七七年を選ばず、実態の定かでない一九〇四年のできごとに起点をもとめたようである。かくして「FCシャルケ〇四」は一九二〇年代半ばからドイツ・サッカーの表舞台に登場した。この時期からはメンバーの名前や職位も判明している。なおこの時代のサッカーのプレイヤーは職業をもったアマチュアで、いわば社会人スポーツであった。内訳では、第一回チャンピオンシップの時の登録プレイヤー二五人の内一人は工場労働者、二人が鉱山夫、二人が専門職能者(アンゲシユテルター)であった。

したがって、職業的特性からは、まったく《労働者の組合》と言ってもよかった。しかし「FCシャルケ〇四」が所属したのは「ドイツ・サッカー連盟」、すなわち市民的な組合連合組織であり、労働者スポーツ運動の組織ではなかった。

もっとも組合メンバーは労働者で、組合はDFBに所属というのは例外的というほどではなかった。上位団体を選ぶモチヴェーションとしては、試合ができるチャンスを優先させることもあれば、市民性に対するATSBの拒否の姿勢を嫌った場合もあった。が、「シャルケ〇四」がことさら《市民的労働者スポーツ組合》のレッテルを貼られたのは、要するに活躍がめざましかったからである。

(アマチュアリズムとプロフェッショナルリズム)

メンバーの大半が労働者で所属は市民的な組合連合という特質がどこまで関係したどうかは定かでないが、「FCシャルケ〇四」は、その後のスポーツに不可避となった難題に直面した。一九三〇年八月二五日、DFB規律審査会は「FCシャルケ〇四」に対してアマチュア規定に何重にも違反しているとして、一年間の試合の停止を決定した。サッカーはすでに事業として意義を強めており、特に地域規模、さらに全国規模で優勝候補に挙がる組合では経営状態は団体の維持において不可欠となっていた。強豪「FCシャルケ〇四」もその一つで、また一九二八年に「グリユックアウフ・カムプフバーン・スタディオン」をオープンさせたばかりだった。一一〇〇〇人を収容できる当時としては規模の大きなもので、一九七八年まではここがメイン・スタディオンであった。規律審査会の罰則の理由は選手が金銭面でアマチュアではなくなっていることであったが、大きな収益を挙げている有力組合は多かれ少なかれその傾向を強めていた。そのため、どこかで線引きをする必要があったのが裁定につながったようである。

これに対して地元ゲルゼンキヒェンでは猛烈な反撥が起きた。地元紙もDFB規律審査会の措置を不当として《FCシャルケ〇四への背後の匕首》といった見出しを掲げた。よく知られているように、第一次世界大戦のドイツの敗北は内部の裏切りによるもの見方、

すなわち「首伝説」が広まっていたが、そのフレイズがここでも使われたのである。かく、地元世論が沸騰するさなか、裁定から一週間後の八月三一日に、「FCシャルケ〇四」の財務責任者ヴェイリー・ニールがライン＝ヘルケ運河に身を投げて自殺した。真因は不明だが、DFB規律審査会への抗議の意思表示、一年間の収入の途絶によって自身が建設を推進したメイン・スタディオンの維持が財務面で不透明になったことへの悲観、あるいは裁定と選手への金銭支援の板挟み、などの憶測がなされた。本人は職能意識の高い銀行マンであったと言われている。翌日の葬儀には、ゲルゼンキルヒェンの一般市民多数も併せて六〇〇〇人が参列した。棺は「グリユックアウフ・カムプフバーン・スタディオン」に向かった。鉱山夫はその職位の伝統的な揃いの式服を着用し、サッカーチームのメンバーが弔辞を読んだ。地元紙はその様子を《夥しい数の参列者は、組合が享受する多大のシンパシーと、組合が人々と共にあることを証している》と伝えた。

それに続いて、もう一つのできごとが起きた。二人の有力選手で義兄弟でもあったフリッツ・ツェパンとエルンスト・クツォラに外国のサッカー組合から誘いがかかり、特にオーストリアの「アドミラ・ヴェーン」は高額を提示した。しかし二人は、危機にある所属組合を見捨てるわけにはゆかないとしてオフアーを蹴った。その潔癖さは、サッカー組合の団結と連帯と友情の証しとし時人を熱狂さ

せた。これらがDFBに直接的に影響を及ぼしたかどうかは定かでないが、「FCシャルケ〇四」への試合停止措置は少し縮められて九カ月間となった。サッカー組合の登録選手に対して、DFBは一日当たり二五マルクの支給を決定した。その後の道のりは長い、アマチュアリズムと営利の関係が調整に向けてわずかに動き始めたのである。

(補足)

スポーツのアマチュアリズムにちなんで補足を挟もうと思う。二〇一九年のことだが、NHKの大河ドラマ「韋駄天」は、マラソン選手の金栗四三と水泳指導者の田畑政治の伝記に沿ったスポーツ物語であった。戦国時代と幕末・維新に材料をもとめることが多い大河ドラマにあつてやや異色で、興味をもった。そして視聴しながら何か所かでメモをとった。その一つとして、前半(四月二日放映)で気になる場面があつた。一九一二年のオリンピックのストックホルム大会を途中棄権した金栗が高等師範学校を卒業して教師になるはずのところ、練習に専念したいと言い出し、それを校長の嘉納治五郎が『プロフェッショナルになれ』と励ました。何が元になっているのか分からないが、実際にそういう言い方をしたのだろうか、との疑問をもった。この時期のオリンピックの出場者はプロのアスリートではなかつたからである。

それに関連して、ストックホルム大会では大きなできごとがあつた。大会に出場したアメリカ人のなかに、かのジム・ソープ(一八八八—一九五三)がいたのである。五輪には走幅跳び・走高跳び・五種競技・十種競技の四種目に出場し、五種競技と十種競技で優勝し、それらを構成する円盤投げ・走高跳・砲丸投げ・一〇米ハードル・一五〇米走で一位となった。その輝かしい活躍を見て、スウェーデン国王が直接話しかけて賞賛した。ところが帰国後、ジム・ソープは優勝の記録を取り消された。米オリンピック委員会がそれを強くもとめIOCも最終的に受け容れた。理由は、ジムが大学生でありながら野球の試合で報酬を受けとつたことがあり、アマチュアの原則に反すると言うのである。ジムは父親がアメリカインディアン、母親がフランス人とアメリカ・インディアンの子であり、人種的な差別がその処置には絡んでいた疑いがある。大河ドラマではストックホルム大会が日本人がはじめて五輪に出場した記念すべきものということからかなりの回数があてられていたが、この世界的な事件にふれてもよかつたのでは、との感想をもった。

もうひとつ話題を挙げると、アマチュア原則は第二次世界大戦後でもなお根強いものがあつた。一九六四年の東京オリンピックの時のIOC第五代会長アベリー・ブランデーはその最後の守護神であつた。一九七二年の札幌での冬季大会でもその地位にあり、企業と広告の契約を結んでいたオーストリアのアルペンスキー選手カール・

シユランツを試合の直前に出場停止にして選手村から退去させた。筆者などは同時代の出来事として当時のニュースを覚えている。今では考えられないことだが、『プロフェツショナル』という言葉はその頃まではオリンピックの精神に反するとされており、それを考え合わせると、そこからはるか遡る一九二二年の五輪直後にその言葉がつかわれたのは史実に合っているのだろうか、という感想である。

「三」 スポーツと文化との関係をめぐる理解の推移

具体例を少しはさんだが、言うまでもなく幾らもある話題の中のほんのわずかである。とは言え、歴史的経緯であるだけに、様々な脈絡がからんでいる。とまれ、以上を踏まえて、本稿のタイトルに挙げたもう一つの課題に移ろうと思う。スポーツと文化の関係である。むしろこれ自体、大きな問題であり、かすめる程度でしかないが、このテーマに注目を促すことになればと考えている。

《文化としてのスポーツ》

スポーツと何かという問いは基本的にはスポーツ研究の分野に属し、事実、その議論を主に担ってきたのはスポーツ研究者であった。もっともその種類の文献はあまり翻訳されてはいないが、幸い

なことに、中心的な問題が簡潔に論じられた金字塔と言ってもよい著作が日本のスポーツ研究の専門家によって紹介されている。オモ・グルーペの『文化としてのスポーツ』である。原著は一九八七年、邦訳は一九九七年であった。グルーペ（一九三〇—二〇一五）は、ドイツ体育大学（ケルン）でスポーツ教育学を学び、やがてテュービンゲン大学教授として教え、その間「ドイツ・スポーツ学会」会長も務めたその分野の第一人者であった。『文化としてのスポーツ』は、スポーツをめぐる多岐にわたる問題のなかで、スポーツとはそもそも何かという根幹をあつかっており、その思想のダイジェスト版とも言える。

グルーペによれば、スポーツと文化という問題は三つの段階を経たとする。ただし三段階目の表現については、グルーペの考察に触発された同じ圏内の理論家の表現をも併せて挙げる。

- (一) 非文化としてのスポーツ
- (二) 文化としてのスポーツ
- (三) スポーツの脱スポーツ化と《スポーツとしての文化》

補足だが、文化との関係におけるスポーツの位置は、スポーツの本質を問うことそのものというわけではない。グルーペは、本質に関する考察はむしろスポーツとプレイ (Spiel) との関係という構

図において考察をおこなったいる。プレイは《遊び》でもあり、ホイジンガの言う《ホモ・ルーデンス》という人間の存在様式も入って来る（ただしホイジンガ自身はスポーツに遊びの本質的なはたらきを強くは見えていなかった）。それに比べて、文化との関係は、スポーツの本質そのものの解明というより、スポーツをめぐる諸現象が社会総体との対して占める位置を突きとめるための問いの立て方である。この補足を踏まえた上で、三つの階梯を少しなぞってみたい。

非文化としてのスポーツ、すなわち永くスポーツは文化として認められてはいなかった、というのは想像に難くない。しかし事は単純ではない。もつとも、その時期には文化はまだ高度文化に限定されており、今日のような拡大された文化概念が一般化するのとは比較的最近のことだからである（グルーペ「永島・等訳」一九九七、一五―一六）。

というのは、ドイツにおけるスポーツの発展の最初の百年間に――発展の始まりを大まかに前世紀（「訳注」十九世紀）後半の中頃に定めるとするなら――スポーツは、一義的で閉鎖的な文化理解にぶち当たったからである。文化は規範として理解されていた。それは教養であり、教養人の身分証明書でありレッテルであった。それは上質の演劇、一流の文学、クラシック音楽、クラシック美術、つまり、いわば「もっと高尚な文化」と同義語であった。こういうものとして文化は、自分の機能を

教養人と非教養人を区別することと心得ていた。このことはとくに、政治的に権力をもたない教養市民階級の目標でもあったのである。

そうしたなか、スポーツの推進者たちが、スポーツが決して文化と無縁ではないとの説明に力を注いだのは当然のなりゆきであった。もつとも、大きな潮流とまではゆかなかったために、非常に多いとは言えないその試みも十人十色といったところがある。が、その中で特に説得力があると受けとめられたのは、誰もが高度文化の担い手とみとめる偉人たちとスポーツとの関係に着目することであった。つまりドイツ文化に屹立する巨人たちがスポーツマンでもあったこと、あるいはスポーツに強い関心を示したことに光を当てるという行き方である。そして、その試みにおける最大の成果は、ドイツ体育大学（ケルン）の創設者でグルーペの師にあたるカール・ディーム（一八八二―一九六二）の名著『ゲーテと体育』で、労作『世界スポーツ史』と並ぶライフワークであった。なお、ここでも少し話題を拾っておく方がよいだろう（以下のゲーテをめぐる項目は河野二〇一四からの抜粋）。

ゲーテとアイス・スケート

カール・ディームには『スポーツマン、バイロン』などの小振り

の著作もあるが、やはり『ゲートルと体育』が圧巻で、そこにはゲートルだけでなく、同時代の文化的リーダーたちのスポーツへの関わりもまとめられている。フリードリヒ・ゴットフリート・クロップシュトゥック、ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー、シュトルベルク兄弟などである。なおこうした角度からゲートルを取り上げるのは無理なことではなかった。過大評価は気をつけなければいけないが、ゲートルは、今日のスポーツにあたる実技にもかなり深くかかわっていたからである。フェンシングと乗馬は、ダンスと同じくらい愛好していたが、特に注目してよいのは、ゲートルが氷上橇とアイス・スケートに、それらが（今日のスポーツにつながる）遊戯として一般化し始める最初期に夢中になり、パイオニアの一人と言ってもよいくらいの位置を占めることである。デイームの著作でも、「橇とアイス・スケート」の項目にはほぼ五〇頁が当てられている（デイーム一九四八、二七〇―三二二）。なお文人たちの中で最初にアイス・スケートに夢中になったのはクロップシュトゥックで、ゲートルとヘルダーがその後を追ったのである。と言うことは革命的な文藝思潮《シュトルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）》の人脈と期せずして重なるところがある。ゲートルの個人史では特に二十歳後半にあたる一七七〇年代末から八〇年代であるが、冬になると毎夜のように氷上に出ていることが自伝や手紙から判明する。以後も五〇歳頃まで滑っていたらしく、ヴァイマルでも気の許せる訪問客には氷上の楽しみを勧めて

いた。なお、当時の橇遊びとアイス・スケートは冬季に池が凍るのを待って、夜中に月明りの下で滑っていたのである。昼間は気温が上昇して氷が割れる危険があり、ゲートルのメモの中にも、昼間に滑っていた子供たちが湖面が割れて亡くなったらしい、という一文が見える。また氷がなめらかに張るように昼間に岸辺の草を抜くのだが、《皆は手袋をしていたが、僕は素手でやった》と青年期のゲートルは熱気を示し、また《昨日も夜中滑った》、あるいは《月が雲に隠れたので途中でやめるしかなかった》といった記述を残している。

なお橇とアイス・スケートが十八世紀の後半半ばから急に人気を集めたのは、この時期に現れた新しい遊戯だったからである。それには時代思潮と照応するところがあった。つまり啓蒙主義である。ちなみに時代精神の面からスポーツの種類を見ると、（スポーツという範疇の意識がそこにはたらいっていたかは疑問だが）騎馬やフェンシングやアーチェリーは（今日のスポーツ種目からは外れる鷹狩も加えて）武藝が背景になっており、中世以来の伝統に立っている。それに対してルネサンスの精神が重なるのは器械体操であろう。これには人間の身体運動の合理的理解の端緒という意味でルネサンスの精神が生み出した理論書がある。病弱であったフランス王シャルル九世（在位一五六〇―一七四）のためにその岳父神聖ローマ皇帝マクシミリアン二世によって傅育官に補された《王の軽業師》アルカンジェロ・トゥッカーロ（一五三五―一六〇二）が晩年に書き記し

た『跳躍と宙返りをめぐる三つの対話』（一五九九年）である。今日から見れば基礎的な知見ではあろうが、重力の制御、特に踏切板の効果を最大限に活かす身体の動きを説いている。

そうしたトゥッカーの著作もあり、器械体操は一八世紀末の身体教育への関心の中で重点項目となった。体育教育の先覚者ヨーン・クリストフ・グーツムーツの教育施設で経験を積んだフリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーンの体操実技が器械体操を中心に組み立てられたのは、その伝統に立っている。もともと、グーツムーツはパイオニアらしく幅広く（今日の）スポーツ種目に目配りしており、たとえばその手引書ではイギリスの野球にも注目し、野球のグラウンドの図面を入れている（参照、河野二〇一四、に再録）。これらに対して、櫛とアイス・スケートは、やや違った性格をもっていた。先ず、速度と重力の制御において画期的であった。それを可能にしたのはスケート靴で、ゲートのメモや手紙にはスケート靴への言及が見られ、身体運動を仲介する器具への関心がうかがえる。と共に、櫛とアイス・スケートは、当時の体育の概念に沿っていると言ふよりも、むしろ端的に《遊び》（Spielプレイ）であった。

フリードリヒ・シラーによる美と遊びの理論

ここでゲートと並ぶドイツ文化の巨星に注目しなければならぬ。スポーツが非文化として片づけられていた時期、それと並行し

て逆に身体運動に美を見る考え方があったことである。その起点にして拠りどころになったのはフリードリヒ・シラーの美学理論であった。シラーは、ゲートや他の同時代人のように自らはスポーツに親しまなかった。しかし後世のスポーツ理解への影響の大きさはそれ以上と言つても過言ではない。一七九五年に発表された書簡体の論説『人間の美的教育について』はシラーの思想が凝縮した観があり、全二七書簡から成る。⁶⁾当時、書簡体は内面を吐露する形式として、文藝作品だけでなく、論説でも好んで採用された。もともと、シラーの論説はスポーツを特に扱っているわけではない。が、『遊び』（Spiel / play）の概念を挙げて、動きを本質的とする人間存在を美に向かうものとして説いたことよって、身体の動きに関係づけて読まれてきた。スポーツ研究が特に重視してきたのは「第十五書簡」における遊戯衝動の理論で、論説は『人間はまったく文字通り人間であるときのみ遊んでいるのであり、遊んでいるところでだけ彼は真の人間なのです』というテーゼへと昇りつめる。《遊び》（Spiel / play）の意義を説いたことでは、ヤン・ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』と並ぶが、後者とは異なり、美学を枠組みとした思索である。しかし美学の体系や美学の個別問題を論じているのではないために、エッセイの性格の書簡体だったと思われる。なおここにスポーツの人間学的本質をさぐったのはカール・ディームであり（これには中山厚生の研究がある⁷⁾）、またその点に関してさらに

考察を深めたのはオモロー・グルーペであった。

（今日の文化とスポーツ）

永く非文化という不遇を託^{たく}つたスポーツだが、今日の状況は一変しており、スポーツは文化の表舞台に立っている。政治・経済からマスコミと日常の広い分野にまで地歩を占める巨大な現象となっていることは、ことさら言を要しない。その辺りをオモロー・グルーペは次のように論じている（グルーペ「永島・等訳」三四―三七）。

文化は今や大演劇、一流コンサートやオペラや美術展覧会、良質な文学だけではなくなっている。文化は存在するものを記述する。一般的な好みや理想を、支配的な生活様式や美的な好みをも、道徳観や好まれるモードを、広範な高尚や慣習を、もちろん芝居やテレビや映画や音楽のシーンで起きていることから――しかしまた、推理小説、喜劇、ポピュラー音楽、ポルノ、宗派、性に関することをも。しかも科学、教育、技術、そして宗教と同時に――記述するのであるから、人によって受け入れ難いと思うのも無理からぬことである。ありとあらゆるバリエーションと形式を持つスポーツも今やその一つなのである。

文化はいまだ構造のさだまらない一般的な背景なのであって、ほとんど拘束力を持たぬむしろ任意のものであり、記述的

カテゴリーとしても、落書き文化、レクリエーション文化、裸体文化、産業文化、抵抗文化あるいはオフ文化等々といった造語が示すように漠然としている。……社会学者フリードリヒ・ナイトハルトは……文化を構造、機能、特徴、境界が明確に認識できるといふより、むしろほやけていることが特徴であるあの「フアジーな体系」のなかに入れている。

このような文脈のなかで、スポーツは独自の文化現象として発展してきた。そしてこのことは、スポーツが文化的により良いものへと洗練され、その未熟な時代の罪業を乗り越えたからというより、むしろ、スポーツの量的に見極めがつかない普及と並行して、文化といわれるものの理解が根本的に変化したためである。……ベッケンバウアーとネッツァーは、カラヤンやブラシッド・ドミンゴともはや比較されない。つまり、彼らは偉大なサッカー選手として比較されるべきなのである。フランクフルトのサッカー場（バルトステディオン）にいるブンデスリーグ・アイントラハトのサッカー観客は、フランクフルト歌劇場の高貴で瀟洒ななりをした聴衆と比較されることはない。

このような比較は以前は、スポーツに不利な結果に終わったものだ。……スポーツファンやそのなかの知識人たちが、スポーツは文化のなかに深く根づいていると指摘する必要は、

ずいぶん前からなくなっている。ようするに、スポーツが文化であることは自明の理となったのである。……

ちなみにカール・ディームが『ゲーテと体育』を構想したのは一九三〇年代であったことが「序文」からうかがえるが、スポーツを高次文化との関わりで位置づける意図はむしろ最初期からだったと思われる。そのライフワークが上梓されたのは一九四八年だが、その下で学んだオモ・グルーペの世代にとっては、もはやスポーツを高次文化と関係づける努力を要しないまでの現実の状況が広がっていた。今の引用に続く一文はそれを端的に物語っている。

何十年も対立的に論じられた文化とスポーツの関係は、……今日ではもはやせいぜい学問的なテーマにはなっても議論のテーマにはならない。発展がそれを追いついてしまったのである。……

その《発展》とは今日誰もが親しんでいる現実である。スポーツが国際大会から地域のイヴェントまで、社交の場から学校教育まで、総じてポジティブに受けとめられている現象である。その現実が一般化するの、それほど昔ではないことが不思議なくらいである。

《スポーツとしての文化》

民俗学を日常研究へと改革したヘルマン・パウジンガーは、テュービンゲン大学教授としてオモ・グルーペの同僚であった。しかも公私ともに密接で、パウジンガーはスポーツ関係の学位論文の審査に屢々かかわった。グルーペの理論を日常研究の面で、スポーツ研究界における議論に注目しつつ、スポーツの現今の特質を言い表すものとして《スポーツとしての文化》に言及した。もともとこのフリーズ自体もスポーツ研究者の提唱であり、またグルーペの論説の中にもそれに近い表現がなされていた（グルーペ「永島・等訳三九」。パウジンガーの考察はそれらを踏まえている。グルーペの六五歳を祝う記念論集（一九九九年）への寄稿で、その後パウジンガーのスポーツ関係の論集に収録された（パウジンガー二〇〇六、四）。

スポーツと文化の関係は、スポーツ学のなかでは常にテーマになってきた。《文化としてのスポーツ》をテーマとして見解を表明したのはオモ・グルーペだった。彼は後にもこのテーマについて種々の発言をおこなっている。またグルーペへの記念論集のなかでクラウス・カハイは「社会のスポーツ化とスポーツの脱スポーツ化——社会の諸現象への総合的注解」を寄せ、ヘルムート・ディーゲルは「私たちの文化のスポーツ化とそのスポー

ツへの影響 — スポーツをめぐる付随的な小考」を論じた。

これらの研究が示すのは、第一には、文化概念の拡大がスポーツと文化の関係をより切実なものにしたこと、文化に接近する条件が緩和され、むしろハードルがほとんどゼロになったことである。とは言え、もしその推移を言葉の上での名義変更あるいはレッテルを貼りかえて煙に巻いているだけと解するならば、推移を過小評価することになる。文化の底が抜けたのは、言葉遣いのなかだけのことではない。第二に他面では、スポーツが社会的・文化的な主導イメージを生み出す度合いが高まっていることで、社会（あるいは社会と等価である文化）がスポーツになった、ないしはスポーツ的になったことである。事実、スポーツはコミュニケーションの中心的なテーマに躍り出ている。マスメディアにおいても、日常の直接のコミュニケーションにおいてもそうである。スポーツは、流行（モード）の広範な分野にとって基準となってきた。広告にも影響をあたえているが、スポーツ用品に限らないのは言うまでもない。スポーツは多くの集団や位相のライフスタイルを特徴づけており、スポーツ性は認識と評価の目安にもなっている。スポーツは想像を絶するほどの社会的な大きさをもつようになったのである。それはスポーツという言葉に軽いエリート性をかぶせてみる向きにもあてはまる。スポーツは《VIPの関わるものとなり、

いわば十九世紀のオペラに相当する》、とはディーゲルの論であるが、氏は多年この《VIPスポーツ》に強い関心を寄せ、おそらく十九世紀への立ちもどり願望を間々もらしている。……

文化の底が抜けたのは、とは言いで得て妙である。先に挙げたスポーツにおけるアマチュアリズムがほとんど放棄されたのもここから説明できるところがある。かつてスポーツは比較的上流の社会的階層のライフスタイルを前提にしているか、あるいはドイツの体操運動におけるような心身のバランスある鍛錬と集団行動を基準にしていた。そこから営利が忌避され、また個人技と過度な特定技能への特化が疑問視された。そうした基準が崩れ去ったのである。またその基準を維持していたのは、前章で概観したように上・中流の市民であった。したがって当時の市民的基準がはたらいっていた。しかし、これまで前章で歴史的推移をみたように市民のスポーツ組織に労働者層が接近し、時に歓迎され時に反撥を受けながら両者の仕切りは崩れていった。つまり古い市民的価値観は維持できなくなり、それと一体の伝統的な文化概念は消滅した。文化の底が抜け、何もかも文化という状況が広がった。

注目すべきは、スポーツが文化であること、オモイ・グルーベの言い方では文化の野をつくる数々の部分文化の一つであることが少

しも疑念を抱かれなくなった今日、逆にスポーツを文化の中で上位にあるものと位置付ける動きへと進んでいる。あるいは、すでにそうなって久しいと言ってもよい。言うまでもないが、スポーツは、今日ではステイタスとなっている。これを少し取り上げる必要があるだろう。

ステイタスとなったスポーツ

バウジנגガーは先の引用文のなかで、スポーツ学者ヘルムート・ディーゲルがスポーツは《VIPの関わるものとなり、いわば十九世紀のオペラに相当する》と、スポーツを新たなステイタスへと押し上げる志向をみせていることに触れている。事実、今日、スポーツは、ディーゲルがそれを論じた時期に比べてはるかにステイタスとなっている。あるいはそれにとどまらない。

バウジנגガーは、スポーツの（本質そのものではないがスポーツを社会現象たらしめている）多様な要素ないしは《装飾》が、逆に広く社会の価値観や物の見方に本質的な影響をあたえ、スタンダードの供給源にまでなっていることを指摘した。どれも説明がほどこされはするが、とりあえず項目だけを取り出すと、身体性、緊張、即応性とゲーム性、コンクール熱、ランキング志向、マスメディア性、たわいのなさ等である。また別の論説では、サポーターとファンが取り上げられ、さらにスポーツが他のどの分野にも増して英雄

信奉（ヒーローとクイーン）を活気づかせて社会的トレンドとしたことが言及される。事実、これらの複合現象として、スポーツは社会のさまざまな分野で指標や基準や範例の役割を果たしている。スポーツをたしなんで行っていることは、人物評価において間違いなくポジティブに受けとめられる。またイエローカード（あるいはレッドカード）やオフサイドやアシストや、あるいはバスケットボールの三口イントシュートが日常語彙と化しているだけではない。さらに深層の動きでもある。伝統的な高度文化を際立たせたものにしてきた諸々枠組みの意義が低下して判断の手掛りをみつけにくい中で《スポーツ性は認識と評価の目安にもなつて》おり、スポーツとその複合現象が《社会的・文化的な主導イメージを生み出す度合いが高まっている》。それを踏まえて、かつての《文化としてのスポーツ》というフレーズと対比させるなら、《スポーツとしての文化》と言うことになる。

必ずしも一方方向の動きではないが、スポーツの型が文化の他の領域に影響をあたえている事例は枚挙にいとまがないほどである。より慎重な言い方をするなら、スポーツにおいても存在し、スポーツのなかでひとしお特徴を發揮した型が、文化のなかで形づくられている。

むろん、スポーツ学の専門家たちは、その複合的な社会現象への広

がりを、スポーツの本質が見失われるリスクでもあることに留意しつつ、『スポーツの脱スポーツ化』に警告を発した。オモ・グルーへの『文化としてのスポーツ』の最後にあたる第三章「スポーツとプレイー スポーツ文化とプレイ文化の意味連関について」がかなり長い考察であることは、スポーツ学ならではの基本的課題との取り組みである。その考察はスポーツとシュピール (Spiel) の二者の関係を絞られ、弁証法的と言ってもよい記述によって、この二つの概念の相関を探っている。

〔四〕 アソシエーション (クラブ・組合) から見た市民文化のダイナミズム

最後に社会の流動を取り上げておかなければならない。ここで問題にしているのは市民社会の文化、簡単にいえば市民文化であるが、担い手には結社が大きく関係している。先に体操とサッカーをめぐる推移に少し目を走らせたが、それはさまざまな団体をめぐる変動であった。具体的には、市民による体操 (スポーツ) あるいはサッカーの団体と、労働者による体操 (スポーツ) あるいはサッカーの団体という区分で、両者が歩み寄ったり離れたりしながら事態は進んでいった。そうした団体は、十九世紀前半に到来した『アソシエーションの時代』の結社の性格を基本としていた。基本理念ではフラ

ンス革命に遡る『自由な人間』による結社である。それゆえ結社形成の個別モチベーションを掲げながらも、自由な個人の現実化をもとめたのである。クラブ・組合の結成は地縁や血縁や因習によるのではなく、先覚者の呼びかけに応じて身分や出自も職業その他の条件に制約されない集まりであった。歴史学者ニッパードイはそれを何度も強調しており、たとえば体操運動の場合である (ニッパードイ一九七二「河野・訳」一二五―一二六)。

体操者は、国民的・デモクラシー的かつ全民衆層を包括する平等の運動であることをめざした。それを彼らは、同じ特殊な服装を着け、互いの呼びかけを『Dm』で統一することによって強調するという試みをおこなった。

その意義は結集の媒体である何らかのモチベーションに終始するのではなく、自由な存在としての人間の可能性そのものに向かっていた。

《階層と流動》の並行例としての歌唱クラブ

スポーツと並んで一般性のあるクラブ・組合の一つとして歌唱クラブを参考例として見ておきたい (ニッパードイ一九七二「河野・訳」一二三)。

歌唱者の大きな祭典はリベラリズムを標榜して、身分の区分

も階級の枠も突破した全民衆のデモンストレーションとなった。これらの祭典で強調されたのも正にそれであった。《歌唱

者のサークルの中ではいかなる身分の枠も区分になつてはいけない》、これは一八二七年のプロツヒンゲンにおける歌謡祭の合言葉であった。それは一八四五年のエツケルンフェルデでの祭典でも、またもや強調された。《すべての身分は：形によつてもレットテルによつても区分されず、都会人は村落民のもとにあり、両者のあいだには貴族もおれば・・・貴賤もあり、公務員も下働きもいる》。同時代人の文化史家オットー・エルベンは、組合の国民政治的な性格と並べて、この社会的・社交的、民衆的、一口に言えば全ての民衆を包含する性格を特筆した。

しかし歴史の赴くところ、この状態は次の段階へ進んでいった。社会構成の変化である。大まかな歴史で見ても、フランス革命後の反動期には有力市民と復興した貴族など旧勢力が併存していた。そして一九三〇年のフランスの七月革命によつて市民が主導権を獲得したが、主体は大ブルジョワジーであった。やがて小ブルジョワジー、さらにプロレタリアートの存在が無視できないものとなった。一八四八年のフランスの二月革命、さらに一八五一年の十二月二日の《ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日》によつて、時代はこれらの諸勢力の拮抗と併存へと移っていた。カール・マルクスの階

級史観による鮮やかな整理である。

十九世紀半ばまでは、多様なクラブ・組合には、出自も階層も区別なく平等に参加する原則が生きていた面があるが、そこを支配していたのは市民的な雰囲気であった。つまり上・中流の市民の思考や価値観が中心になり、貴族出自者もそれに併せ、また教養をもとめる下層の者もそこに加わっていた。しかし《プロレタリアート》が時代の流行語となるまでにその階層が増大するや、市民的な雰囲気はクラブ・組合に亀裂が生じるのは避けられなかった。市民たちはクラブ・組合の中に労働者が増えるのを歓迎せず、後者も窮屈を感じるようになった。かくしてクラブ・組合から労働者が排除される動きが起きる中、社会主義の指導者たちは労働者独自のクラブ・組合の設立によつて労働者の希求に応えることを選んだ。その軌道を敷いたのは社会主義の指導者フェルディナント・ラッサールであった。クラブ・組合で一般性が高い種類の代表は歌唱クラブで、各地に「ラッサリア」を冠する労働者歌唱クラブが結成された。またその名称ではなくても、やはり労働者の集りとしての歌唱クラブが増えていった。また後者が広まると共に、市民歌唱クラブとの間で時には非難の応酬も起きた。

しかしこれを以て、労働者層がその歌唱活動においてまったく独自であったと考えると事態をとりそこねる。組織的には分裂をきたしたり別であったりしても、そこでの選曲を見ると、市民歌唱クラ

ブも労働者歌唱クラブのどちらも同じトレンドにあったことが判明する。それはもう少し後の十九世紀末の労働者の大会でもみとめられ、式典では労働運動歌が歌われはするが、それと併せて、式典後のパーティーなどでは、市民の会合と同じような歌種やダンス曲が響くのである。つまり「インターナショナル歌」が高唱されるのはそれとして、それに併せて時代に特有の甘美なメロディーが好まれ（市民的作曲家では「ローレライ」のフリードリヒ・ジルヒアー、また近似した傾向の労働者作曲家ウートマン）、さらに「天国と地獄」を中心に据えたメドレー「オッフエンバックアーナ」（今日のロザンタール編曲版よりも前のヴァージョン）がにぎやかに響くのである。そうした動向を、バウジンガーは、イヴェントの選曲だけでなく、十九世紀末頃から二〇世紀初めに労働者が図書館から借り出した書物のデータや、労働者の家庭のピンナップにも注目して、教養や嗜好においては市民と労働者の間で近似したトレンドがはたらいっていたことを具体例によって明らかにした。しかし文化的には近似していても、現実には市民と労働者が同居できたわけではなかった（バウジンガー一九七三、三三三）。

かく文化的な形式と姿勢に同じ方向への収斂が起きたことに注目したが、だからと言ってそれは社会的接近では断じてなかった。つまり相互交流における敷居の解消という意味ではない。

市民社会は、労働者が文化的な成人証明をどれほどデモンストレーションしようとも受け入れなかった。内的にも外的にも、距離はあまりも大きかったのである。

しかしそれも、市民と労働者という対比的な二項の両方にさらに変化が進行したことによって、条件が変わってきた。

市民社会の新たな再編の中で

市民と一口に言っても、十九世紀の後半が進むに連れて、マルクスが階級として措定した市民階級の具体的な中身、つまり大ブルジョジーから小ブルジョワジーへという規定を崩すような現実が進行した。その大きなものは市民の多くが会社員（サラリーマン）となっていたことであろう。ドイツ語ではアンゲシユテルテ（語尾が形容詞変化の名詞で、これが女性単数、男性単数はアンゲシユテルター）である。

ちなみに、今日、社会的なポジションをめぐる身近で深刻な問題であるのが、これであろう。たとえば西ヨーロッパの諸国で失業者問題にさいして、大学卒業者の就職動向がよく話題になるが、そこで耳にするのが、アルバイターとアンゲシユテルテという二種類の勤務形態である。アルバイターは労働者、アンゲシユテルテ（ター）はサラリーマンと訳されることが少なくないが、筆者は会社員の訳

語もあり得ると考えている。それは十九世紀後半、アンゲシユテルテ（ター）という言い方が定着していなかった頃には *private* (E) Beante (F)、つまり民間企業官僚（私企業公務員）という言い方がなされたことを踏まえている。企業が現代ほど大規模ではなかった頃、最大の人的組織は国家の行政機構であった。そこで機能していたのが官僚制度であるが、それと同じような組織形態が企業の普及拡大のなかで民間でも発展した。なお私企業において官僚機構と類似した運営システムが発展したことに注目してアンゲシユテルテ（ター）の成立と展開を探ったのは、歴史学者ユルゲン・コツカの研究成果（一九八一年）で、これによってコツカは特に知られることになった。⁽⁸⁾ 筆者が会社員の訳語を選んだ根拠の一つは、そうした公務員との対比ならびに重なりにある。とまれ、アンゲシユテルテ（ター）は、今日の日本と照らし合わせると正規雇用の会社員、中身では高度専門職にあたる。つまり求人絶対数は足りていても、アルバイトとして就業することを忌避して、アンゲシユテルテ（ター）として就職する機会を待つ大学卒業生が西洋諸国には多いのである。彼らの受けとめ方では、アルバイトは代替が幾らもある労働力、それに対してアンゲシユテルテ（ター）は専門的知見の提供とその対価として雇用者側と雇用契約と結ぶ勤務者である。

なお時間をもとすことになるが、アンゲシユテルテ（ター）が労働人口に占める割合が高まる趨勢を最初に深刻に受けとめたのは、

マルクス主義者たちであった。階級概念が成り立たなくなりかねない状況と映ったからである。ここでは立ち入らないが、議論の口火を切ったのがマルクス主義の理論家エーミール・レーデラーであったのは不思議でなかったのである（一九一二年）⁽⁹⁾。

市民が階級概念として危うくなる現実、当然にも『プロレタリアート』についても起きた。今日では死語と言ってもよいくらいである。つまり市民も労働者も、十九世紀に確立された概念では現実には合わなくなって久しいが、伝統的な文化概念の社会的土台がそれであった。それが崩れたとすれば、伝統的な意味での文化の意味、その排他性やヒエラルヒーが説得力を失うのは時間の問題であった。二〇世紀に入ると高次文化 (Hochkultur / high culture) に対する大衆文化 (Massenkultur / mas culture) という言い方が現れたが、あらゆる現象に文化の語を付けることができる状況に入ったことを意味した。高次文化の担い手とされる教養市民の意味での市民の枠組みが揺らいだけでなく、プロレタリアートの概念も維持できなくなった。先のバウジンガーの引用文で言えば『敷居の解消』が起きたのである。しかも、敷居が存在する中でも、市民文化と労働者文化が実際には近似したトレンドを動いていた。その動き自体は、単純に市民文化を範例として労働者文化が追従するというものではなく、土台が変化する中で探り出していったと言つてよい。固定した型に倣ったのではなく、現実の土台の然らしめるところ市民的

クラブ・組合と労働者のクラブ・組合のという区分のなかで、どちらもが適切な形態を探り出し、そしてほぼ重なったのである。

それにもつわるエピソードを一つ挙げてよい。ナチスによる諸団体の強制的組織編成から解放された第二次世界大戦後、体操者(トゥルナー)たちが団体の再建を図ったときのことである。会場は、かつて一八四八年の三月革命を受けてドイツ統一のための民衆主導の国民会議が開催された記念碑的な殿堂、フランクフルトのパウル教会堂であった。そこで西ドイツの初代大統領テオドル・ホイスが演壇に立った。占領軍の意向に逆らうごとき演説が大受けしただけでなく、大統領はこう言って喝采を浴び、階層間のぎくしゃくした空気を吹き飛ばした。

もともと懸垂するのにプロレタリアート・マルキシズムもなければ、腕立て伏せにブルジョワ・資本家などもなかったのです。それをするだけの技能を有するものが行なってきたのです。誰がどこに所属しているか、そんなことはソーセージがどうだこうだという程度のものでしたのです。

《ドイツ語圏の市民化過程における二つの論議：『スポーツと文化』と『労働者の市民化』》⁽³⁾を指すのに“gewurscht”の語が選ばれたのは会場の地域性を念頭においており、事実、ホイスは印刷にあたってこれを残させた」とパウゼンガーは解説している。gewurschtは

Wurst(ソーセージ)とは語源は別だが類音語であり、いささか俗な駄洒落でもあったのである。

社会的な数居が崩れたことが、あらゆる現象を文化としてとらえることができる状況を出現させたが、それは平等を意味するわけではない。階層だけでなく、さまざまな差異と区分が厳然として存在するばかりか、また絶えず新たにつくられる。同時にそれと並行して、階層・差異・区分を帳消しにするような等し^{じつ}し^なの意識も醸成される。この問題はここでの課題をはみ出すところがあり、改めて取り上げなければならぬが、とまれ古典的な市民社会の枠組みが崩れ、そこで全てが文化となりはしたが、その新たな状況の中で新たな区分・格差と新たな等し^{じつ}し^なが^つく^られ^てゆく。スポーツが今日の文化の型を牽引する『文化のスポーツ化』が奇異ではなくなり、またスポーツのステイタス化が進展したのは必然的だったのである。

参考文献

- グラーペ一九八七「永島・等共訳一九九七」『オモ・グラーペ(著)永島惇正・岡出美則・市場俊之(共訳)『文化としてのスポーツ』ベースボール・マガジン社一九九七(原著)Omno Gruppe, *Sport als Kultur*. Zürich 1987.
- ゲールマン一九八七『ジークフリート・ゲールマン』シャルケ〇四 — 『市民的』労働者体操組合「Siegfried Gehrmann, *Scharke 04 - ein „bürgerlicher“ Arbeiterverein*. In: Hans-Jachim Teichler und Gerhard Hauck (Hg.), *Illustrierte Geschichte des Adbetersports*. Bonn

- [H.W.Dietz Nachf.] 1987, S.155-160.
 ハイムト・カール・ハイムト『ゲーテと体育』Carl Diem,
*Körperziehung bei Goethe. Ein Quellenwerk zur Geschichte des
 Sportes.* Frankfurt am Main 1948.
 Dietz 1999 = Deutscher Fußball-Bund (Hrsg.), *100 Jahre DFB:
 Geschichte des Deutschen Fußball-Bundes.* Berlin [SVB Sportverlag],
 Berlin 1999.
 ニッパータイ一九七二〔河野・訳〕= トーマス・ニッパータイ(著)河野(訳・
 解説)「十八世紀から十九世紀前半のドイツにおける社会構造としての
 組合」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明二一』第四三三号
 (二〇一九)一〇九一-一〇九六頁(原著)Thomas Nipperdey, *Verein als
 soziale Struktur in Deutschland im späten 18. und frühen 19.
 Jahrhundert.* In: Geschichtswissenschaft und Vereinswesen im 19.
 Jahrhundert. Beiträge zur Geschichte historischer Forschung in
 Deutschland, von Hartmut Bookmann, Arnold Esch, Hermann
 Heimpel, Thomas Nipperdey, Heinrich Schmidt. Göttingen 1972, S.1-44.
 ハウト一九八七= ゲルハルト・ハウト「サッカーはプロレタリアートのス
 ポーツ種目か。『労働者体操・スポーツ連盟』の変遷から」(原著)
 Gerhard Hauck, *Fußball - eine „proletarische Sportart“ im Arbeiter-
 Turn- und Sportbund?* In: Hans-Joachim Teichler und Gerhard Hauck
 (Hg.), *Illustrierte Geschichte des Arbeitersports.* Bonn [H.W.Dietz
 Nachf.] 1987, S.160-169.
 ハウジンガー一九七三〔河野・訳〕= ヘルマン・ハウジンガー(著)河野(訳・
 解説)「市民社会の形成と労働者——市民化をめぐる解釈類型の帰趨」
 愛知大学国際コミュニケーション学会『文明二一』第五一号(二〇一三)
 一三三—一七八頁(原著)Hermann Bausinger, *Verbürgerlichung:
 Folgen eines Interpretiments.* In: Kultureller Wandel im 19. Jahrhundert.
 Hrsg. von Günter Wiegmann. Göttingen 1973, S.24-49.
 ハウジンガー一九九九= ヘルマン・ハウジンガー「スポーツとしての文化」
 Hermann Bausinger, *Kultur als Sport.* In: Bausinger, Sportkultur.
 Tübingen 2006, S.4-14.

- 河野二〇一四「スポーツと民俗学——ドイツ民俗学の視角から」『民俗学
 のかたち ドイツ語圏の学史にさぐる』創土社 二〇一四、五三九—
 六〇三頁
 河野二〇一五『世間と社会』は《日本と西洋》を比較できる基準だろうか？
 (一)「愛知大学文学會『文學論叢』第一五一輯(平成二七〔二〇一五〕
 年二月)三五—六八頁
 河野二〇一八『世間』は日本社会の特異性か？——欧文の翻訳における
 『世間』の用例に即した検証」愛知大学人文社会学研究所『文學論叢』
 第一五五輯(二〇一八年三月)一五四—一二三頁
 河野二〇一九「ドイツ語圏を例とした西洋社会の集団形成——ヘルマン・
 ハウジンガーの日常研究に注目して」『文學論叢』第一五六輯(平
 成三一〔二〇一九〕二月)一一三—一三〇頁
 河野二〇二一「西洋社会の日常的な集団形成の歴史像——特に十九世紀前半
 のドイツ語圏における『組合の時代』について」『文學論叢』第一五八
 輯(令和三〔二〇二一〕二月)一一三—一六九頁
 河野二〇二二「西洋市民社会と集団形成——ドイツ女性史から見たクラブ・
 組合——『文學論叢』第一五九輯(令和四〔二〇二二〕三月)二五—
 五四頁
 河野二〇二三「市民社会の結社としてのクラブ・組合の過去と現在——
 ドイツ語圏のフェルアイン(アソシエーション)に探る——」『文學
 論叢』第一六〇輯(令和五〔二〇二二〕三月)一一三—一三〇頁

注

- (1) 近代市民社会が《自由な個人》によってつくられること自体は原理で
 あるが、現実の社会には常に、階層だけでなく、多様な差異や格差が作
 用している。それにも拘わらず均一性や等質性の観念が行き渡っている
 ことについては、市民社会の展開に伴って必然的に形成される特殊な思
 念によると見て、その思念の特質と構造の解明を課題としたのが、民俗
 学を背景にして日常研究を推進したヘルマン・ハウジンガーであった。

参考文献に挙げたパウジンガー一九七三「河野・訳」は、そうした市民社会論の一つである。

(2) 参照：ハンリー・キッシンジャーの学位論文「回復された世界」メッテルニヒとカースルレーと平和問題」(A *World Restored: Meternich, Castlereagh and the Problems of Peace, 1812-22*, 1957) 邦訳：伊藤幸雄(訳)『回復された平和』原書房 一九七六年、なおカースルレー子爵はウィーン会議時の英外相で、新たな国際秩序を構築するにあたってメッテルニヒのカウンター・パートであった、とキッシンジャーは位置づけた。

(3) 参照：ヘルマン・パウジンガー「スクワット・自由・国家統一——テオドル・ケオルギ追想」パウジンガー二〇〇六所収(一四八—一五八)

(4) 今日のデータはDTBのHPを参照： https://de.wikipedia.org/wiki/Deutscher_Turner-Bund

(5) 《清廉決別》(reinliche Scheidung) にこのことは次を参照： Hartmut Becker, *Die Reinliche Scheidung. Versuch einer Trennung von Turnen und Sport in den Jahren 1921-1924*. In: Ders. (Hg.), Für einen humanen Sport. Gesammelte Beiträge zum Sportethos und zur Geschichte des Sports, Schorndorf 1995, S. 98-109. また体操指導者であったノットエンヘルフの『ライント体操史』でも随所で言及される。参照： Edmund Neundorff, *Die deutsche Turnerschaft 1860-1936*. Berlin 1936.

(6) 初出誌をネット公開する。Friedrich Schiller, *Über die ästhetische Erziehung des Menschen. In einer Reihe von Briefen*. In: Horen, Bd.1, 2.Stück, S.82-89. 邦訳は多くの種類があるが、たとえば次を参照：フリードリヒ・フォン・シラー(著) 小栗孝則(訳)『人間の美的教育について』法政大学出版局 一九七二年

(7) 中山厚生「《文学と体育の接点論考》カール・ティームにみられるフリードリヒ・フォン・シラーの影響」人間の美的教育について」からの影響について「天理大学学报」第三六卷四号「体育編」(一九八五年) 九一—一〇一頁

(8) Jürgen Cocka, *Die Angestellten in der deutschen Geschichte 1850-1980: vom Privatbeamten zum angestellten Arbeitnehmer*. Göttingen 1981.

(9) Emil Lederer, *Die Privatangestellten in der modernen Wirtschaftsentwicklung*. Tübingen 1912

(10) 参照：ヘルマン・パウジンガー(著) 河野(訳)『ドイツ人はどこまでドイツ的か——国民性をめぐるステレオタイプ・イメージの虚実と因由』文鏡堂二〇一三(原著 二〇〇〇) 七八頁